

研究会合報告(2004年度-2005年度)

雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	40
ページ	339-350
発行年	2005
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011409/



研究会合報告—二〇〇四年度—二〇〇五年度—

平成一六年度

吉田辰雄研究員、太田辰幸研究員退任記念講演会

二〇〇五年三月一九日(土) 一五・一五—一七・〇〇

スカイホール

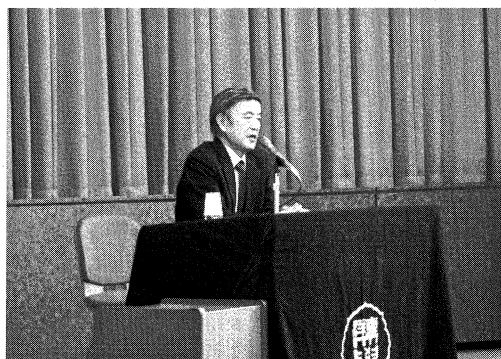
私のアジア研究—今後の課題と方法

アジア文化研究所研究員
本学経営学部教授

太田辰幸

I. 現在までの研究

いままで私のアジア研究とは、主としてアジアの経済発展に関する研究です。とくに特定の地域に限定することなく、経済学的アプローチからアジアのNIESやアセアン地域の発展を分析するものが大部分です。私は過去三〇余年の間、国際機関や日本の政府機関、種々な研究所からの委託研究にも従事してきましたが、いずれもアジア経済に関するもので、これらは地域開発、各種経済開発プロジェクト評価、産業調査の分野が多い。自分の研究としては、アジアの産業政策と経済発展、貿易と投資の役割、政治体制と経済発展の関連を実証的に分析したものが大部分であります。特定の地域を研究対象とはしませんでした。アジアの経済発展に貢献した産業政策、政治体制、貿易と投資、産業分野では電子産業などを経済的アプローチで分析してきたといっていいいでしょう。



過去の研究をまとめたものが二〇〇三年に上梓した『アジア経済発展の軌跡—政治体制と産業政策の役割』(文真堂出版、二〇〇三年)ですが、これは非経済的要因である政治体制によって産業政策が規定され、産業政策いかんによってアジアの経済発展が少なからず影響を受けることをアジア一〇数力国について定量的に分析を試みたものです。これは経済発展において産業政策として開放的政策の重要性を指摘したものであります。しかしこの研究において産業政策を左右する政治体制は、たとえば同じ民主制といってもその内容はアジアでは国によって少なからず異なるので、政治体制の態様も非経済的要因とくに文化、社会構造によって影響を受けざるをえない。この三、四年前から多様性豊かなアジアの経済発展研究も文化・社会的要因の考慮なしには各国間の発展パターンの相違さえも把握できないのではないかとの思いを強くしております。正統派経済学の分野

においても以前は経済パフォーマンスに関しては、文化はまったく問題にならないと文化要因の役割は認められていなかったが、九〇年代半ば頃以降、理論家たちも文化の問題を認めるようになってきております。田因みに「文化経済学」の分野も初期は亜流であったが、今では経済学におけるひとつの独立した専門領域となり、国際学会も創設され学会誌(J. of Cultural Economics)も発刊され

ている。このような時期にアジア文化研究所のプロジェクトに参加させていただいたことは誠にありがたいと思っております。

Ⅱ. 今後の方向…文化的要因の重要性

九〇年代はじめにアジアの経済発展の研究において儒教文化の貢献や権威主義体制の役割の重要性を認める主張が現れ、経済要因以外の文化、政治体制の役割に目が向けられるようになった。従来の経済発展研究の一般的な方法は、たとえば工業化戦略、産業政策とか投資や輸出の増加など成長要因の分析は経済的要因に限定される傾向があった。たしかに先進工業国では経済的パフォーマンスに影響を与える文化の役割はめったに認識されることはなかった。しかし多様性に富むアジアの途上国世界では文化、社会構造など非経済的要因が経済発展を少なからず左右することになる。経済発展によって社会構造、文化、人々の生活パターンが変わり、豊かになるにつれて人々のニーズも変化する。これがさらに発展パターンに影響を及ぼすことになる。文化と発展の概念は緊密に絡み合っている。文化を構成するものとは、ひとつの見方は「伝統・習慣・慣習・信念など一連のもの」であり、これが集団を結びつける」(Throsby, D., "Economics and Culture", 2001) ものである。国の場合は宗教的心情、社会的慣習、継承された伝統などが共通の価値観として含まれる。この価値観が一国の経済政策に、またミクロの企業行動や消費行動に影響を及ぼす。経済主体は文化的環境の中で生存し、意思決定しているのであり、この環境が選好の形成や消費者や企業、一国経済全体などの様々なレベルの行動に影響を与える。一方でまた発展につれて政府に対する要求、消費者の価値観、さらに企業行動

も変化する。このような一国の文化的・社会的さらには歴史的文脈を考慮にいれてこそ、はじめて経済分析も意味を持つてくるものである。途上国の固有な文化と調和するような方法を講ずることによってしか貧しい環境を改善することができない。途上国の貧困を解決し、経済発展を促進する戦略は、その成否を左右するかもしれない文化変容の過程にも注意を払わなければならない。文化面のアプローチが求められる所以である。

文化の態様によって価値観もまた少なからず規定されると思われる。たとえば何に最も幸せを感じるかという価値観も国によって随分異なる。これは誰にも切実な問題でありながら学問がさして取り上げてこなかったテーマである。最近、「アジアから問う幸福 その二」のシンポ(平成一七年二月一〇日東京大学東洋文化研究所)において、アジアでは国によって幸せと感ずる価値観、対象が異なるという調査報告を聞く機会があった。どの国においても各経済主体はそれぞれの文化の枠組内で最も高い価値基準を見出しているものを目標として経済行動を起こすものであり、これがすなわち一国のマクロ経済パフォーマンスを左右することになる。幸せの条件のひとつが健康で長寿であるとすれば、医療の問題も重要な関心となるが、この問題もわが国ではあまり取り上げられてこなかった。

最近の私のフィジー島での調査(二〇〇五年二月中旬)で現地のある中年の原住民に「幸せですか」と聞くと、幸せと答える。彼らは首都(Suva)で働いていても引退すれば故郷に帰り、村の部族の仲間と一緒にいたいという。その村は島でボートでしか行き来できないようなところで都市の利便性は全くないが、酋長以下部族の結束が固く、皆が助け合って生活している。酋長が村の所有の資産や不動産などから得た収入は皆で

分け合うから、別に貯金をする必要もなく、あくせく働く必要もない。現地経済はインド系住民が支配しており、土着原住民の所得水準は低いが、それでも満足し、部族仲間とすることに幸せを見出している。このような文化・社会構造の分析なしにその国の経済を語り、一人当り所得水準で発展を論じることはいささかの外れというほかはない。

アジア経済を研究するにも経済学だけでは本質に迫ることは難しいといわなければならない。社会学、文化人類学、比較文化論、歴史を始め、他の関連分野からの分析ツールを用いた学際的なアプローチが求められることになる。このことは経済発展だけではなく、他の研究テーマにおいても interdisciplinary approach が必要とされることは変わらない。

このアプローチの必要性、重要性を認めない人はいないが、現実問題として、そう簡単に実施できることではない。専門家は自分の研究分野に閉じ籠もる傾向があることも一因である。幸いアジア文化研究所は比較的自由に開放的であり、遠慮なく発言できる雰囲気があり、各分野の専門家が集まっておられ、多方面にわたる研究書も整っている。学際的研究を推進していくには望ましい環境にあるといえる。まさに研究所の名称どおりアジア文化研究において先端的な役割を果たせる基盤は整備されていることから、今後のいっそうの発展が期待できるものと思われる。

進路指導研究の課題—進路指導からキャリア教育へ

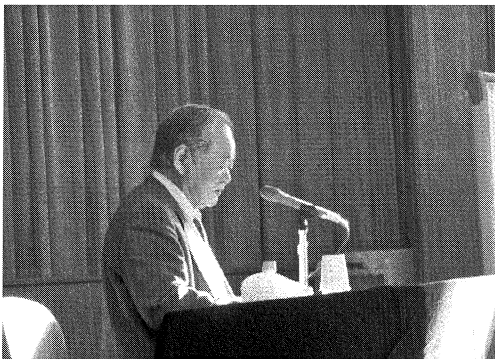
アジア文化研究所研究員 吉田辰雄
本学文学部教授

1 はじめに

進路指導研究は、世界的な傾向として、「職業指導 (Vocational Guidance) から進路指導 (Career Guidance) へ」、「進路指導からキャリア教育 (Career Education) へ」の移行がみられる。すなわち、古い職業指導のモデルは、仕事の内容だけの問題であったのが、やがては幅広い人間の内容、職業と生活、職業とレジャーの問題にまで及ぶように変化していき、そして、ある時期に限定した職業指導から、個人の発達に即した一生涯にわたる進路指導に変化してきた。

したがって、進路指導は、発達理論 (生涯発達心理学など) に根拠を置き、個人の個性化、社会化を図りながら、進路に関する発達課題に主体的に取り組み、自己の人生設計に基づいて進路を選択・決定し、やがて社会的職業的自己実現が図られるように組織的・計画的・継続的に指導援助するというユニークな面を持っている。

わが国の学校教育では、昭和三二



年まで中学校・高等学校段階で職業指導が実施されている。職業指導の具体的内容としては、職業知識の啓培、職業実習、個性に関する調査および諸検査、進学及び就職、卒業後の補導とともに公共職業安定所との相互協力関係の徹底が求められていた。

しかし、次第に中学校卒業者の高等学校進学の高まりを社会的背景として、職業指導の内容をかかえ込んだ形で昭和三三年から職業指導から進路指導へと名称を変えて現在に至っている。学校進路指導の活動領域は、①生徒理解・自己理解 ②進路情報資料の収集と活用 ③進路相談 ④啓発的経験 ⑤進学・就職のための指導・援助 ⑥卒業者の追指導、に六領域があげられて実践されてきた。ところが、最近、わが国では、従来の職業指導、進路指導を中核に据えて、キャリア教育 (Career Education) を推進する方向に大きく転換を図っている。

2 進路指導からキャリア教育へ

キャリア教育の源流は、アメリカの一九七〇年代にさかのぼることができる。一九七〇年一二月、教育長官に就任したシドニー・P・マーランド (Sydney P. Marland Jr.) がアメリカの公教育改革のための重要な改革の一つとして提唱したものである。キャリア教育は、アメリカ連邦教育局の主導で行われた教育改革の重点施策の一つであり、「すべての人にキャリア・エデュケーションを」をモットーに掲げ、全米の幼稚園から大学までの教育全体をキャリア教育の観点から精力的に実践的教育活動を展開したのである。

キャリア教育の目標は、いうならば、すべての児童・生徒・学生に対し

て、知的教科と職業教科を総合的に指導して、高等学校卒業時に最もふさわしい進路を選択し、社会的職業的自己実現が図られるように知識、技術、態度を習得し、人間としての望ましい生き方を指導しようとするものである。アメリカでは、時限立法で「キャリア教育振興法」(一九七九年度開始、一九八四年度終了) が発動し、全国レベルで推進され、その後、州レベル、民間レベルで継続的、発展的に実施されている。アメリカのキャリア教育の主な定義をみると、

「キャリア・エデュケーションは、初等、中等、高等、成人教育の各段階で各々の発達段階に応じ、キャリアを選択し、その後の生活の中で進歩するように準備する組織的、総合的教育である」

(教育局長官、マーランド)

「キャリアとは、ある人間が生涯を通して従事する仕事の全体である。したがって、キャリア教育とは人間としての生き方の一部として仕事について学び、準備することによって得られる経験の全体である」

(連邦教育局キャリア教育担当次官、ホイット (Hoyt, KB))
などがある。キャリア教育振興法の失効後、一九八四年に「カール・D・パーキンス法」(職業・応用技術教育法) によって、全米キャリア発達指針として総合的プログラムが開発された。その後は「学校Ⅱ職業移行機会法」(School to Work Opportunities Act)、「一人も落ちこぼさないための法」(No Child Left Behind Act) などに引き継がれている。

3 キャリア教育の課題

最近、わが国は、行政課題として「若年者のキャリア形成支援」のため

の施策を打ち出し、①若年者の職業選択行動・意識の変化への対応 ②フリーター、ニートの増加、無業の長期化の問題への対応 ③高校中退者への対応 ④男女が共に能力発揮するための環境整備、に取り組みは始めている。文部科学省は職業指導、進路指導を中核に据えたキャリア教育の推進や、専門学校における「日本版デュアルシステム」の導入を図っている。平成一六年を「キャリア教育元年」と位置づけている。

その根拠として、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」（平成一二年二月）、若者自立・挑戦戦略会議「若者自立・挑戦プラン」（平成一五年一〇月）、文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成一六年一月）などを踏まえてキャリア教育が推進されている。米国の一九七〇年代のキャリア教育の実施から約三五年を経過して今、日本で何故キャリア教育かという考えを抱く者もいる。

それというのも現在のわが国の進路指導は、すでにアメリカのキャリア教育の考え方を多分に取り入れているからである。ただし、これを機会として、今までの進路指導の問題点を改善する機会として捉えてキャリア教育を領域概念と機能概念の双方から捉え直すことが必要である。文部科学省の報告書では、「キャリア教育とは、児童・生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲、態度や能力を育てる教育、端的には児童・生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義している。キャリア教育を単に、職業観、勤労観の育成として考えるのではなく、児童・生徒のキャリア発達を促進し、学力向上にも寄与することに繋げることが大切である。今日の社会的動向

としては、キャリアをワーク・キャリア (Work Career) ではなく、ライフ・キャリア (Life Career) として人間の生涯発達の考え方に立って考えていく生き方の指導、人生設計である。これから本格的にキャリア教育を学校教育の根幹に据えて長期的、計画的、継続的に実施するには、今までの職業指導、進路指導を十分に理解した上で実践することである。

そのためには、キャリア教育のための指導時間の確保、指導に当たる教員の養成、教材開発、生徒・保護者のキャリア教育についての理解、地域の各種事業所・団体の理解と協力が不可欠である。キャリア教育の理論的基礎は、キャリア発達である。このことを前提にして、キャリア教育の特徴として、①生き方の一環として職業について学ぶ教育 ②主体的に進路を選択する能力や態度を育てる教育 ③体験的な学習やガイダンス・カウンセリング機能を重視する ④教科間の連携や家庭・地域との連携が求められる ⑤小学校段階から発達段階に応じて実施することが求められている。

平成一七年度

研究例会

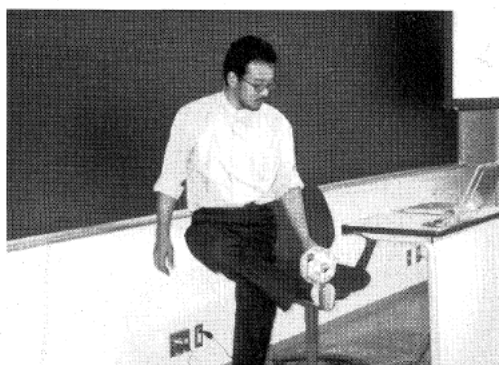
二〇〇五年五月二一日(土) 一四:四〇~一七:〇〇

白山校舎 五号館二階 五二〇二教室

ミャンマーにおける伝統スポーツの伝承形態

— チンロンの場合を例にして —

アジア文化研究所研究員 宇佐美 隆 憲
本学社会学部教授



平成一六年度文部省学術フロンティアの研究の一環としてミャンマーに一年間滞在し、「ミャンマーにおける大都市・地方都市・農村の文化変容」について比較研究を行った。同時に「ビルマ社会における伝統スポーツの果たす役割」を明らかにするための調査を、ラッウェイ(ミャンマー伝統ボクシング)、チンロン(ミャンマー伝統蹴鞠)などについて調査した。

宇佐美 隆 憲

本報告は、チンロンの概要と基本的な知識を紹介しながら、一般化されるチンロン世界の認識を、一人のチンロン指導者の指導方法やそこで伝授される身体的な知識に見いだそうとするものであり、また同時に、

この指導者の知識の伝授が、それを獲得する人間の中に、どのように取り込まれ伝承者となっていくのかその原理について若干の検討を加え、伝承の問題を考えていこうとするものである。

詳細については、『学術フロンティア報告書 二〇〇五年度』(二〇〇六年三月発行)所収「ミャンマーにおける伝統スポーツの伝承形態—チンロンの場合を例にして—」(本文ミャンマー語)を参照されたい。

巴金（中国人作家）の離郷について——追悼を兼ねて

研究員 野間 信幸

中国人作家巴金は、一九〇四年一月二五日に成都で生まれた。今年（二〇〇五年）一〇月一七日、百年におよぶその生涯を閉じたばかりである。

巴金はペンネームであり、本名は李堯棠、字を芾甘という。字を持つところに、出自があらわれている。成都の生家では、長輩（排行の上の世代）二十数人、兄弟姉妹（排行の同じ世代）三十余名とともに、広大な敷地を持つ屋敷に住んでいた。この時期の体験と見聞が、後に代表作のひとつとなる自伝風長編小説『家』に結実する。一九三三年のころである。

巴金が成都に住んだのは、一九二三年五月までであった。両親を早く亡くしていた巴金は、後見人であった長兄の許可を得て、三兄李堯林とともに

に、成都を離れ上海に出た。巴金の離郷の目的は、新文化の中心地である上海で、アナキズムやエスペ란ートの活動に従事しつつ、学歴をつける（中学校入学）ところにあった。

この巴金の離郷は、閉塞状況の打開を図ったものとして、従来説明されてきた。しかし離郷に踏み出すには、大都市の持つ磁力のように巴金を引き寄せたものの他に、巴金の背中を押すものがあつたはずである。それを成都の風土や環境に、求めることができるのではなからうか。そこで巴金の背中を押したものとして、成都の(1)自然条件、(2)保守的気風、(3)住居構造、以上の三つの側面から検討を加えてみることにした。

(1) 自然条件について

成都は、成都盆地の東南部にある。成都盆地（川西平野）は、四方を険しい自然に囲まれており、これが外部との交流を隔てることになる。いわゆる蜀道難である。しかし盆地のなかにある成都付近は、巴金の一世代上で四川出身の作家である郭沫若（四川楽山人）にいわせると「江南地方と同様、一望の平原である」（郭沫若自伝）となる。実際に成都を歩いてみても、この街の平坦さにはすぐ気付かされる。平坦な土地は歩きやすいが、起伏に富まぬ道は、やがて退屈さをもたらすことになる。

また「蜀犬日に吠ゆ」ということがある。曇天がちで、太陽が顔を出す機会の少なさを言ったものだ。霧のかかり易いこうした気象条件も、当地の人々の気質形成に、影響を及ぼしているはずだ。

(2) 保守的な気風について

成都の街につきまとう保守的な雰囲気は、当地に到着してすぐに目に飛び込んでくる市政府前の巨大な毛沢東像を見ても、想像がつく。また正通

順街（成都市街の北東部）にあった巴金の生家は、一九六〇年あたりから、その跡地が戦旗文工団（劇や舞踏で革命の宣伝活動に従事する文芸団体）の宿舍となっていた。二〇〇二年八月に訪問したとき、宿舍敷地を囲む目測一四〇メートルほどの外壁に「加強城市管理 嚴禁亂擺攤設点」（都市管理を強化し、むやみに露店を出すことを厳禁す）なるスローガンが大書されているのに驚いた。驚いたというのは、句の不揃いではなく、壁書きスタイルの時代錯誤ぶりに、である。

成都が内包するこうした保守性は、この都市の構造に要因を見出すことができそうだ。「成都城は二千年来、何度も改修、拡張が行われてきたが、その位置は基本的に移動することはなかった」（笈文生『成都・重慶物語』）という指摘は、示唆に富む。

(3) 住居構造について

『四川民俗大典』（四川人民出版社）によると、旧時代の当地の住居は、公館・雑院・舗面の三つに分類できるといふ。壁に囲まれた公館（屋敷）は、外部とのつながりを断ち、内向きに広がる構造を持っている。この公館の造りは、巴金の生家とほぼ同じである。

以上をまとめるに、巴金のように成都で生まれ育つということは、①平坦な土地で、②霽ってどんよりとした空気を吸って、③閉ざされた都市の、内向きの住居に住んで、④伝統と保守的な雰囲気包まれながら、日々の暮らしを重ねてゆくことなのである。

巴金の離郷には、巴金を引き寄せたもの（上海など沿岸大都市の磁力）だけでなく、巴金の背中を押したものが存在して、双方の力が働いて行なわれたのであった。

研究例会

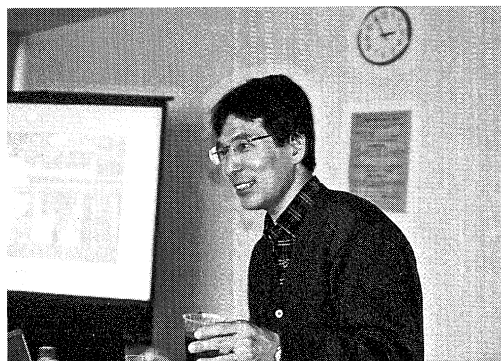
二〇〇六年一月一日（土） 一四・四〇（一七・〇〇）

白山校舎 三号館二階 第二会議室

現代的ワクフの挑戦—ハムダルド財団（パキスタン）の事例から

アジア文化研究所研究員 子 島 進
本学国際地域学部助教授

本発表では、パキスタンにおけるハムダルド財団の活動を、南アジアにおけるイスラーム復興の一環として紹介した。ハムダルドは、イスラーム医学の伝統に則った製薬会社である。この会社の生み出す利益を、公共の福祉のために活用すべく創設されたのがハムダルド財団である。その仕組みは、イスラームの慈善制度であるワクフを現代的にアレンジしたものである。



なっている。すなわち、ハムダルド製薬のもたらす収益を「財源」とし、それを基金としてハムダルド財団が大学や病院等の「施設」を建設していくスタイルをとっている。ハムダルドの活動を通して見えてくるのは、「国家の領域を限定するなかで自律的な市民社会を形成し、自律的な福祉制度の拡大を模索していく道」としてのイスラーム復興である。

一九〇六年、デリーに開店した小さな薬局に、ハムダルドの起源はたどることが出来る。創業者のハキーム・アブドゥル・マジードは、イスラーム医学（ユナーニー）に基づいた薬の調合を生業としていた。彼の夢は、イスラーム医学の伝統に則った製薬産業を興すことだった。同時代のハキームたちが、先祖伝来の家業として医学知識を排他的に保持していたのに対し、アブドゥル・マジードは薬の調合法を標準化・近代化し、それによって「万人への同情と痛みの分かち合い」ハムダルド」という理想を目指そうとした。さまざまな生薬の開発を進める中で、彼はルーフ・アフザの商品化に成功した。この種の飲料（シャルバットと総称される）は、それまでもインドの家庭で広く飲まれていたが、それをうまく製品化したところに、アブドゥル・マジードの才能を認めることができる。彼は志半ばにして一九二二年にこの世を去るが、二人の息子にこのルーフ・アフザを残した。今日まで愛好され続けているこの飲料によって、ハムダルド製薬の礎は築かれた。分離独立に際して、息子たちは別々の道を歩み始める。長男のハキーム・アブドゥル・ハミードはデリーに留まり、繁栄する家業を受けついだ。そして一九四八年、ハムダルドのワクフ化を宣言する。次男のハキーム・ムハンマド・サイードは、親族の制止を振り切り、新生パキスタンに飛び込んでいった。当時の首都カラチへ渡ったハキーム・ムハンマド・サイードも数年のうちに商売を軌道に乗せ、一九五三年にハムダルド・パキスタンをワクフ化する。一九六四年、それぞれの国においてハムダルド財団が創設された。「知識」と「健康」を掲げるハムダルド財団の活動は多岐にわたるが、インドとパキスタンの両者に共通するのが、ハムダルド大学の創設である。大学で教鞭をとる近代的ハキームたちは、

大病院における医療活動を担うとともに、製薬会社としてのハムダルドの新薬開発に従事。さらに次世代のハキームが学生たちのなかから登場している。

大学設立の背後にあるのが、「イスラーム文明（とりわけイスラーム医学）の再興」という目標である。この目標に向かって、ハムダルド財団・大学は多数のイスラーム関係の学術雑誌や書籍を編集・発行している。また、イスラーム文明、とりわけイスラーム医学に関する国際会議をしばしば開催している。

ハムダルド財団は、ワクフという伝統的な慈善制度を、現代的な文脈で機能するように作り変えたという点で重要である。ワクフに関しては、「運営が市場の競争原理の外側に位置するため、活気が失われ停滞することになる」との問題点が指摘されているが、これに対してハムダルドは「市場の競争原理の中にあるワクフ」として機能している。